

担任学級のクラスサイズの変化が 教師が行うフィードバックに与える影響

○山森光陽 (国立教育政策研究所)

中島健一郎 (広島大学大学院)

キーワード：クラスサイズ，学級規模，フィードバック

問 題

クラスサイズによって教師が行う指導の実施状況に差異が生じるかについては、それを支持する知見 (Betts & Shkolnik, 1999; Rice, 1999) が示されている。一方で、クラスサイズに適合的な指導を教師が実施するとは限らないといった主張も見られる (Blatchford, 2012; Hattie, 2005)。また、形成的アセスメントとして実施されるフィードバックに関しては、正誤や得点を示すことと比較して、達成目標と実現状況の差を示すことや、説明を与えることの方が学習成果に与える効果が大きいという知見が、メタ分析の結果示されている (Kluger & DeNisi, 1996; Neubert, 1998 など)。しかし、同じ教師が同様の集団に対して行うフィードバックのクラスサイズによる差異を検討する、実験的アプローチによる研究は見られない。これは、教師が行う指導の実施状況がクラスサイズによって異なるかについて、一貫した知見が得られていない背景の一つと考えられる。

目 的

本研究の目的は、担当学級のクラスサイズの変化が教師の行うフィードバックに与える影響を明らかにすることである。そのために、2 年間で同様の集団を担当した (学年持ち上がり) 教員を対象とした調査データを分析し、1 年目と 2 年目でのフィードバックの実施状況がクラスサイズの増減によって異なるかを検討する。

方 法

分析対象 2014 年度の山形県内の小学校 (266 校) のうち、以下の条件に当てはまる 47 校 50 名の 2013 年度の第 2 学年、2014 年度の第 3 学年を 2 年間連続して担任 (学年持ち上がり) した教諭。(A) 複式学級非設置 (198 校)。(B) 2013 年度の第 2 学年、2014 年度の第 3 学年の学級担任対象調査の回答を得た (186 校)。(C) 2013 年度の第 2 学年、2014 年度の第 3 学年で、国語の少人数指導を非実施 (131 校)。

分析項目 各学年の年度末に実施した 1 年間の国語の授業における以下に挙げた項目に関する実施の頻度。(1) 単元テスト返却時における目標に対する達成状況の提示 (a)、及び授業中に、(2) 個別に課題に取り組む、(3) 小集団で課題に取り組む、(4) 学級全体で課題に取り組む、(5) 宿題の返却、(6) 小テストの返却の各機会における、(b) 正誤や得点のフィードバック、(c) 考え方や正誤の理由を説明するフィ

ードバック。回答は 4 件法 (いつもまたはほとんど、半分くらい、ときどき実施、ほとんどまたは全く実施しなかった) で求めた。

分析モデル 上記 11 項目についての、1 年目及び 2 年目 (i) における各分析対象教員 (j) の各年度 ($YEAR_{ij}$) における実施頻度 (Y_{ij}) に対して、1 年目のクラスサイズ ($CS1$) が 1 年目の実施頻度、1 年目と 2 年目のクラスサイズの差 ($CSDIFF$) が 2 年目に至る実施頻度の変化に与える影響を、以下のモデルによって推定した。なお、 $CSDIFF$ は担任した学年学級数の変動が生じた場合にクラスサイズの増減の数、そうでない場合には 0 とした。 $CS1$ は分析対象教師が担任した学級のクラスサイズの平均で中心化した。

[時点レベル] $Y_{ij} = \beta_{0j} + \beta_{1j}YEAR_{ij} + r_{ij}$

[教師レベル] $\beta_{0j} = \gamma_0 + \gamma_1CS1_j + u_{1k}$

$\beta_{1j} = \gamma_2 + \gamma_3CSDIFF1_j + u_{2k}$

結果と考察

分析対象のクラスサイズの平均は 1 年目が 23.40 ($SD = 6.96$)、2 年目が 24.15 ($SD = 7.39$)、1 年目と 2 年目のクラスサイズの差の平均は 9.57 ($SD = 4.71$, $MIN = 4.80$, $MAX = 16.00$) であった。分析モデルの推定値は Table 1 の通りであった。なお、確信区間に 0 を含まないものに下線を附した。

この結果から、以下のことが示唆された。

すなわち、担任学級のクラスサイズが大きくなった教師にとっては、単元テスト返却時における目標に対する達成状況の提示 (1a)、学級全体で課題に取り組む機会での考え方や正誤の理由を説明するフィードバック (4c)、宿題の返却や小テストの返却の機会での正誤や得点のフィードバック (5b, 6b) が実施しにくくなる。

Table 1 モデルの推定結果

項目	γ_0	γ_1	γ_2	γ_3
1a	<u>3.34</u>	-0.01	0.21	<u>-0.07</u>
2b	<u>3.46</u>	-0.02	-0.02	-0.05
2c	<u>3.46</u>	<u>-0.02</u>	-0.10	-0.05
3b	<u>3.30</u>	-0.01	0.02	-0.05
3c	<u>3.34</u>	-0.02	-0.05	-0.05
4b	<u>3.78</u>	0.01	-0.02	-0.06
4c	<u>3.70</u>	0.00	0.14	<u>-0.08</u>
5b	<u>3.84</u>	-0.01	-0.04	<u>-0.06</u>
5c	<u>3.38</u>	-0.01	-0.02	-0.05
6b	<u>3.83</u>	-0.01	0.08	<u>-0.07</u>
6c	<u>3.38</u>	-0.01	0.17	-0.07

付 記

本研究は JSPS 科研費 (基盤研究 A: 17H01012) の助成を受けた。